

職人の技

シリーズ②④ 〈シューフィッター〉

株式会社 銀座ヨシノヤ

森野潤一 さん



文=岩瀬大二
text: Daiji Iwase

写真=北原 幸児
photo: Kouji Kitahara

シューフィッターと聞いて、想像する姿はどんなものだろうか。おそらく、店舗でお客様のファッション・スタイルに「フィット」する靴をお薦めし、そしてサイズを測り足に「フィット」させる。こうしたサービス的なものではないだろうか。

「もちろんそれもシューフィッターの重要な仕事です。でも、それだけじゃないんです」

と、森野さんは言う。

「足というのは十人十色。30年ほど前、銀座ヨシノヤの各支店で23cmの靴を買われたお客様の足を1000人ほど集中的に測らせていただきデータを集めました。そうしたところ本来22cmのお客様が23cmの靴を買っていたり、また

24cmの方も23cmを履いていたりすることが分かりました。これは、甲の高さや太さのため

に22cmでは入らずにサイズを上げたり、逆に甲が薄くて細いので24cmではフィットせずサイズを下げるなどされていくことが主な理由でした。お客様の履き心地を考えたら、それではいけない。いろいろな

足のタイプを分類して長さや甲周りのバランスをとった靴型をなるべく多くの既成靴の中に投入していこうという目的で、社内で靴のことをしっかりと考えるための研究会が発足されました。シューフィッターは接客だけではなく、こうし

た商品開発にも資料収集などフィードバックをして連携しています」

銀座ヨシノヤには、シューフィッターの視点から生まれたヒット作として、オーダー対応の既成靴、『CREA（クリエ）』シリーズがあり、より多くのお客様に自分にあった履き心地の靴を提供しているという。

こうした取り組みのためにも、シューフィッターは個々のお客様に対するフィッティングだけではなくシルエットやデザイン、素材や機能を含めた時代性を取り入れた既成靴のトータル・プロデューサーとして

のスキルが必要になるのだ。

例えば、働く女性の足元を美しくするために必要なのはデザインだけではない。彼女はデザインだけでなく、背筋を伸ばしてさうそうと歩けるように、足の疲れを気にせず仕事に打ち込み、快適な朝を迎えられるようにと考えて新素材をソールに投入する。さらに、最近では、整形外科などの医療的な考え方に基づく靴作りも進んでいる。森野さん自身も、医師やほかの会社の人たちとの、足の健康を考える勉強会にも積極的に参加している。

「お子様のおでかけ靴。あまり形は変えられませんが、その中でも考えなければいけないことがあります。小さい頃の足の骨を窮屈にしてはいけないし、お子様の健やかな成長を考えた素材選び、デザ

インも重要なんです」

創業1907年。元号にするとは明治40年。銀座ヨシノヤの百年の歩みは、日本の靴の歴史との二人三脚。これだけの年月にわたって時代のトレンド・リーダーであり続けることは、容易なことではない。ここでいうトレンド・リーダーとは、ファッショントレンドのことではない。ファッションとしての流行を作るだけではなく、靴としての機能、いや、もう一歩踏み込んでいけば、「人の足にとつての靴とは何か？」を時代の先頭に立って考え、実践していくこと。その姿勢そのものを体現する存

足とともに、靴とともに
これからも歩み続ける。



在こそ、シューフィッターなのだ。「何がやりがいていうと：そうですね、靴という小さい世界ですけれど、改良・改善することがたくさんある。終わりがなくていいですか、それが面白いのかな」

「でも足は変わらないんですよ。時代が変わっても。それに対して靴は変わっていく。追いかけてみたいところはありますね。大きい変化も確かに面白いけど、その中で、

ちよつとした変化でアピールするっていうのは結構面白いんじゃないかと。それでお客様に喜んでもらえれば」

靴と足の幸せな関係、そこから生まれる、靴を履く人の幸せ。シューフィッターがこだわるのは、お客様の足とともに歩み続けることなのだろう。



PROFILE

もりの・じゅんいち
株式会社銀座ヨシヤ入社。銀座四丁目店にて販売経験の後、商品課（当時）現在は商品部に配属。足型タイプ分類のプロジェクト、イージーオーダーシステムCREA（クリエ）の企画、銀座ヨシヤシューフィッター養成プロジェクトにかわり、足と靴と健康協議会主催、シューフィッター養成講座指導員としても活躍。現在商品部、企画グループの開発担当として、足型の研究・靴型の研究や、素材の「ヨシヤ基軸」のチッキ業務、社外モニターとの窓口を担う。